

会報

道南

平成14年
新年号

道南会の課題を考える

田 沼 修 一（会長）

昨年九月の夏期懇親会の席で室谷さんから会長辞任の発言があり、私が推薦され、参会者のご承認を頂いて第五代の道南会会長に就任することになりました。大変光栄に思いますと共に、責任の重大さに思いを深くしております。

「ふるさと会」の数は全国の市町村の数に匹敵し、首都圏にある北海道関係の「ふるさと会」だけでも百を数えますがその活動状況は千差万別で、年一回の総会だけの会、機関誌を発行していない会も少なくありません。「ふるさと会」は同郷の人々の集まりで、会員の親睦と郷里の情報交換などが主な目的ですから、活動の基準はありません。

北海道で最も古いと自認している「道南会」の前身で、戦前から東京にあった「函館会」は、函館中学や函館商業出身者で、東京で就職して活躍している方々が集まり、郷里の料理を食べながら思い出を語り合う為のものでした。これが多分「ふるさと会」の原型だと思えます。

ところが戦争で一旦その絆は絶たれ、昭和三十年代後半から「ふるさと会」の復活が始まります。道南会が結成に動き出した昭和三十五年頃からです。高度経済成長政策で首都圏へ進学や就職する若者が激増し、都会の孤独から故郷への心理的回帰が「ふるさと会」活動の原動力になりました。当時の交通事情や収入では、帰省もままならない人々が肩を寄せ合ったのが「ふるさと会」でした。

それから四十年、交通事情は良くなり収入も増えて、帰省は特別なことではなくなりました。「ふるさと会」に人が集まらなくなった大きな理由だと思えます。どこの「ふるさと会」も難しい時代を迎えているといえましょう。

しかしその一方、社会情勢は大きく変わってきました。以前のような大家族の影が薄くなり、出身地に家族や親戚のいない人々が増えていることです。私の場合、父が函館で早く亡くなり、兄弟は自分の希望する職業を選び、父の事業を継

ぐ者がおらず、兄弟で母を引取り函館には親戚もおりません。墓も鎌倉に作りましたから帰省して墓参する必要もなくなりました。しかし郷里への心理的回帰の思いは中々薄れるものではありません。殊に故郷を離れて二、三十年も経ち、定年近くなつて望郷の思いは募るばかりですが、いま住んでいる場所を去つて里帰りするのは大変勇気のいることです。そんな中高年の方々の集いの場としての「ふるさと会」は、新しい使命を帯びてきているといつて良いでしょう。

つまり思い出を語り合うだけでなく、郷里を共にする人々が、様々な行事などで楽しく過ごすことが、新しい「ふるさと会」の役目だと思えます。私が道南会の役員に選ばれた平成九年から、従来の

新年総会夏期懇親会の他に、毎月一回欠かさず、花見やハイキングや見学会などを実施してきたのも、また道南会報を休まず年二回発行して、会員同志や道南や函館の情報を提供するように努めているのも、新しい時代の「ふるさと会」を目指しているからに他なりません。

ところで道南会の当面している大きな課題は、四十年前の創立初期からの会員が高齢化して退会されたり、活動から身を引かれ、会員の世代交替を迫られていることです。二、三十代はともかく、四十代以上の会員を増やす努力を真剣に考えなければなりません。及ばずながら先頭に立つて旗を振りますので、全会員のご支持を願つて止みません。宜しくお願ひいたします。

役員名簿

平成13年12月現在

会 長 田 辺 修 二

名誉会長 室 谷 邦 雄

副 会 長 中 村 隆 俊 副 会 長 川 守 田 孝 平

副 会 長 板 垣 寿 見 子

会 計 監 査 丹 野 康 男

常 任 幹 事 沼 崎 貞 良 常 任 幹 事 三 村 寿 雄

常 任 幹 事 葉 袋 泰

幹 事 上 田 航 幹 事 島 田 瑞 子

幹 事 川 守 田 礼 子 幹 事 福 田 裕 子

幹 事 阿 部 正 身 幹 事 比 嘉 裕 子

幹 事 古 井 勝 春 幹 事 山 木 和 子

幹 事 廣 部 卓 也 幹 事 小 林 嘉 則

願 問 森 本 良 平 願 問 西 堀 正 弘

願 問 相 馬 正 樹 願 問 篠 崎 昭 彦

願 問 早 坂 茂 三 願 問 山 田 道 子

願 問 鳥 本 玲 子 願 問 富 田 朝 彦

願 問 二 上 達 也 願 問 松 田 昇

願 問 山 根 要 願 問 能 味 寿 哉

願 問 西 原 林 之 助 願 問 古 川 雅 章

願 問 弦 卷 鋼 男 (就任願 下線は新任)

会長退任のご挨拶

室谷 邦雄 (名誉会長)

新年お目出度うございます。

私は昨年九月の夏期懇親会で、道南会創立四十周年記念事業がほぼ終了したのを見届けて、会長の職を辞し、名誉会長に推されました。

顧みますと昭和五十三年二月の総会で常任幹事の役を仰せつかり、六十一年一月に副会長、平成九年一月に第四代会長に選任されて今日に至りました。お陰さまで無事会長の重任を果たし終えることができましたが、これは偏に会員や役員の皆様方のご協力、ご支援の賜と感謝しております。

道南会が昭和三十五年以来四十年を経過し益々発展していることは本心に心強い限りです。道南会の発足当時は、四十周年記念誌に福津達男会員が感動的に思いついた「ふるさと会」であったのです。

阿部さんは大正時代、奥尻島の硫黄鉱山に勤務したことがあり、この頃、私の叔父が奥尻小学校の代用教員をしており、二人が同じ下宿で同室で暮らしていたという奇縁があつて、阿部さんは日銀に勤務中の私をしばしば訪ねて来られました。そんな縁もあつて道南会にかかわりを持つようになりました。

阿部さんが道南会を取り仕切っていた頃は函館に縁の深い有楽町のニユートーキョーが定例の会場となつていました。阿部さんは受付係を引受けて万事にわたつて世話をして下さいました。道南会は阿部さんの生き甲斐であつたように思います。

昭和五十三年に阿部さんも高齢になり、会の面倒を見るのが難しくなつたので、私達に引き継がれることになりました。その頃から現在のように組織的に運営されるようになりました。当時の役員は次の方々です。

会長 和田貞一、副会長 山下静一、梁川剛一、会計監査 從二建二、常任幹事 宮本武雄、能味寿哉

室谷邦雄

この皆さんの内、現在生き残つてゐるのは、能味さんと私の二人になつてしまいました。私も満八十四歳を迎えました。私も満八十歳を迎えました。がまだテニスなどをやつて元気でおりますが、そろそろ旅立ちの支度に取り掛かろうと思つておりますので、どうぞ今後ともよろしく願ひいたします。有難うございました。

平成十二年

夏期懇親会出席者

青山節子・安達昌子・阿部正身・荒木道雄・安藤勝秋・石田端・石塚菊枝・泉龍夫・板垣寿見子・市川一彦・伊藤真人・梅田やよい・逢坂義己・加藤信利・金谷博治・川守田孝平・川守田礼子・木村幹雄・帰山武志・小谷泰三・小林寅雄・小林嘉則・胡麻鶴晃世・小森良彦・小山育子・小山和彦・斉藤貞子・沢株正始・沢株尚子・篠崎哲子・渋谷沙稚子・島田瑞子・神れい子・菅原大作・杉田博子・須藤珠美・相馬正樹・染木志郎・高田和扶・高橋健蔵・武内平八郎・竹中裕行・谷内文雄・谷藤由紀子・田沼修二・田村治雄・田村保子・田村良人・田村房江・千葉純

子・土橋道子・弦巻鋼男・寺田耕治・照井陽子・徳田肇・徳谷博・鳥本玲子・永井康人・長島康・中村隆俊・中山泰壽・納代鉄也・新山春一・西村有人・沼崎貞良・沼崎茂子・根來美和子・野沢澄子・早坂茂三・原田美恵子・比嘉裕子・広部卓也・福島紀・福田裕子・古川雅章・古里健三・古里正・松浦和彌・三国栄頭・三国比佐男・葉袋泰・三村寿雄・宮崎紀夫・村上光昭・室谷邦雄・矢内喜代・矢作勝幸・山木和子・山下弘治・山田克明・山田隆・山田道子・吉田すみれ・吉田孝・吉田房子・吉田淑子・若山孝・渡辺宏司・渡辺丞二・渡辺喜子・寺沢豊行

一〇三名出席

新入会員名簿

氏名	出身小学校
安藤 勝秋	銭亀小学校
梅田やよい	千代が岱小学校
加藤 信利	今金小学校
谷内 文雄	大森小学校
土橋 道子	千代田小学校
村上 光昭	江差小学校
山田 隆	柏野小学校
若山 孝	鹿部小学校

以上八名

四十周年記念郷土訪問旅行

昨年夏に企画した郷土訪問旅行は諸般の事情で中止しましたが、計画を別紙の通り練直し、改めて参加者を募集します。

*実施日 五年十九日(日) 〃

二十一日(火) 二泊三日

*行事 記念植樹、市長表敬、

「五稜郭祭り」「松前櫻祭り」見物、懇親会

公立はこだて大学見学等

*旅費 一人四万円以内

*備考 同封の返信葉書で回答

道南会夏期懇親会

十三年度夏期懇親会は九月八日(土)午後一時よりお茶の水の「ホテル聚楽」で行なわれた。参加者は百三名であった(参会者氏名 別掲)

会は福田さんの司会で中村副会長の開会の言葉が始まり、まず室谷会長の挨拶「道南会が四十年も続いたのは、諸先輩のご努力の賜であり、同時に社会的肩書きに捉われず楽しく付き合ってこられた会員の皆様のお陰であります。記念事業も順調に進んで、記念祝賀会も盛大に終わり、立派な四十周年記念誌も出来、郷土訪問旅行が残りましたが、この四十年



という区切りで、私は会長を辞任することにした。長い間本場に有難うございました。後任には田沼副会長を推したいと思しますので、お諮り下さい」

そこで参加者に諮り、満場一致で新会長を選出。田沼新会長は「道南会は室谷会長の指導により、大変よく運営されており、伝統を守り楽しい会として発展させていきたい。世代交替期で新しい会員の入会を積極的に進めて参りたいので、ご支援を賜りたい」と抱負を述べ、新役員の名簿(別掲)を配布、承認された。井上函館市長よりの「当面する駅舎の改築など、函館市の現状に触れた祝辞」を古川東京事務所長が代読した。続いて川守田副会長から会務の報告があった。

早坂顧問が「室谷会長への感謝と田沼新会長への期待」を籠めて祝杯を挙げた。懇親会に入って、新役員の紹介、板垣副会長の司会で新会員の自己紹介が行なわれた。また金谷博治さんの三味線と民謡が披露された。

午後三時、沼崎常任幹事の一本締めで散会した。なお函館市、サッポロビールからワインとビールを寄贈されたことを記して謝意を表したい。(葉袋 記)

新役員紹介

- 会 長 田 沼 修 二
- 〔出身小学校〕青柳小学校
- 〔職 歴〕日本放送協会
- 〔趣 味〕映画鑑賞
- 副会長 中 村 隆 俊
- 〔出身小学校〕北檜山小学校
- 〔勤務先〕戸田中央総合病院
- 〔趣 味〕ゴルフ
- 副会長 川守田 孝 平
- 〔出身小学校〕函館市弥生小学校
- 〔職 歴〕合同容器株式会社
- 〔趣 味〕登山・写真・クロス・スキー
- 副会長 板 垣 寿見子
- 〔出身小学校〕青柳小学校
- 〔勤務先〕(有)センチュリー・サービス
- 〔趣 味〕旅行
- 常任幹事 沼 崎 貞 良
- 〔出身小学校〕函館師範付属小学校
- 〔職 歴〕ラサ商事株式会社
- 〔趣 味〕ゴルフ・旅行
- 常任幹事 三 村 寿 雄
- 〔出身小学校〕日進小学校(釧路)
- 〔勤務先〕祐立エンジニアリング(株)
- 〔趣 味〕ドライブ・旅行・ゴルフ
- 常任幹事 葉 袋 泰
- 〔出身小学校〕七重小学校
- 〔職 歴〕東海興業・日本建設協会
- 〔趣 味〕ゴルフ・スポーツ観戦

道産子サッポロビール会

昭和三十三年から続いている「道産子サッポロビール会」は今年で四十六回を数えます。この会の昨年のイベントのテーマは胆振支庁でしたが、今年は渡島支庁からテーマを提供することになり、管内市町村や各ふるさと会が協力して検討を進めています。最終的な計画が決まり次第、道南会員に参加を呼び掛けますので、ビールを愛好する会員多数の参加を期待しております。(五月二十二日開催)

☆ 事務局移転 ☆

新年より事務局を移転しました。

新事務局 〒230-0052 横浜市鶴見区生麦4-9-13-803

川守田孝平 方 TEL-FAX (045)505-9709

郵便振替口座 00260-8-9320

連絡窓口 〒102-0094 千代田区紀尾井町3-29 第2山本ビル2階

函館市東京事務所 TEL (03)3261-0072

FAX (03)3261-0339

金子鷗亭先生に捧げる

弦巻 鋼 男 (松前会会長)

いた。こうした風潮の中で自由に古典研究に取り組み比井田先生に出会い、毎日書道展の創設に尽力しつつ、古典研究を基礎に近代詩文書を中心に据えて、現代書風の改革に成果を挙げられた。

昭和三十年、先生四十六歳の時、閣議決定として「戦没者追悼之標」の揮毫を委託され、先生は一代の名誉と心身を清め、平成五年まで謹書を続けた。

書家としては毎日芸術院賞を受け、文功労者、日本芸術院会員に推薦され、平成二年文化勲章を授与の榮に浴され、身にあまる光榮と人一倍健康保持に努められていた。

生前、金子先生は私の今日あるのは、ひとえに郷里の皆様のお陰であると話さ

れて、道南会では多年顧問として郷里の後輩に心を配っておられた。

函館美術館に金子鷗亭記念室が開設され、生まれ故郷の松前公園に等身大の銅像が建立されている。

「早春や 風のうなりを

浜で聞く 鷗亭」

十字街に再開発ビル

平成十五年には新しい函館駅がオープンし、十六年に駅前広場が完成するが、西部地区の再開発も軌道に乗りはじめた。これは、郊外への人口流出に歯止めをかけ、十字街地区に、かつての賑わいを取り戻そうするもので、地元商店街と市が協力して取り組み、今年九月に再開発ビルが誕生する。

再開発ビルは四階建ての業務棟と八階建ての住宅棟で、業務棟の電車通りに面する一階に商店と市民や観光客の憩えるホールやトイレ等が設けられ、二階以上は水道局の庁舎となる。住宅棟は八階建てに住宅二十戸が市営住宅として活用される。建物周辺の歩道はロードヒーティング化が図られる予定で、十字街周辺は魅力ある街に生まれ変わる。

(完成予想図参照)



十一月五日、金子鷗亭先生の訃報に接し、生涯現役のまま九十五歳の大往生にただただ感無量のものであった。

先生は明治九年に松前町静浦で誕生、江良小学校、松城高等小学校から札幌鉄道講習所を卒業後、

一旦鉄道に奉職したが、書道への情熱から函館師範二部を昭和四年に卒業。札幌の小学校で教鞭を取る傍ら書道に励み、比井田天来先生に勧められて上京した。

昭和初期の書壇は大家が家元のような立場で弟子を集めて



最初にして最後の感傷旅行

早坂 茂 三（東川小学校卒）

函館市立東川小学校が今年（平成十四年）の三月末で六十五年の歴史にピリオドを打ち、大森小学校と合併統合し、同四月から「あさひ小学校」として再発足する。西部地区の過疎化を反映し現在は小学級、児童数百三十六名ともなれば廃校も止むを得まい。往時茫々夢の如し。

昭和九年三月の函館大火で明治十一年に創立した宝小学校と、大正二年に開校の第二東川尋常小学校が共に焼失した。両校を統合し、現在の東川がスタートしたのは昭和十二年四月である。当時東北以北の最大都市だった函館に鉄筋コンクリート三階建ての近代校舎が落成した。

「白亜の殿堂」と呼ばれた東川は、開校時の学級数三十四、児童数二千六百名を越えるマンモス校だった。

ピッカピカの新校舎に第一期生として入学したのが私である。一クラス五十名五学級のチビたちが「サイタ サイタ サイタ サイタ」の教科書を大声で読み上げた。この年の七月、日中間で本格的な戦争が始まり、日本は軍事国家に急傾斜していく。それでも函館は内地と北海道を結ぶ玄関口であり、日魯漁業が仕切る北洋漁業の大根拠地として殷賑を極め、弁天から十字街、銀座通り、豊川町、東浜

町、西浜町、大門、松風町界隈は活気に溢れていた。様相が一変するのは昭和十六年後である。

真珠湾攻撃で極楽トンボの私も否応なしで軍国少年に染め上げられていく。東川の校長は剣道六段の森萬蔵先生である。日米戦争が勃発して間もなく、五年生で十一歳の私が校長室に呼ばれた。担任の樋口妻先生と一緒に。緊張で体がガチガチになった。「早坂君、きみは作文が上手だ。帝国陸海軍の赫々たる大戦果はまことに喜ばしい。ついては、新聞を読めない低学年の児童のため、屋内運動場入り口の黒板に戦果の模様を書き出してくれ、すまんが頼む」。

赤紙の召集と同じで従うしかない。新聞を丹念に読んで原稿を書いた。登校は七時。当時の函館は寒気がきびしい。級友で字の上手な菊池定雄君が白、赤、黄の白墨を駆使して、黒板一杯に私の読む記事を書いていく。私達のうしろに後輩

たちが集まり、片仮名の文章を声を出して読み、パチパチ拍手して、いつそう気合いが入った。森校長が作業中止を命じたのは、翌年六月、連合艦隊がミッドウェイ海戦で惨敗した後である。私たちの学年は、修学旅行の経験がない。そんな時代ではなかった。私が東川

を卒業して旧制函館中学の校門をくぐったのは、昭和十八年四月である。それ以後、私は母校を訪ねたことがない。なにしろ失敗だらけの疾風怒涛時代を送り、世間に出てからも忙しすぎた。帰郷するたび東川の前を車で走り抜け、入学当時は苗木同然だったグリーンベルトの松林が、見上げるほどに育ったのが印象に残った程度である。愛校心が薄くて恥ずかしい。



須藤 早坂 島田

そんな私に東川の小岩真智子校長から丁寧な便りが届いた。閉校式典と懇親会の案内である。五島軒本店の懇親会では一期生を代表して挨拶をしてほしいという。道南会の才媛で東川の大後輩になる島田瑞子さん、須藤珠実さんも出掛けるというので、老骨も十月二十三日の会合に顔を出した。

六十八年ぶりに訪ねた母校の式典で感動したのは、子供たち全員による見事な「思い出の言」の連携ブレイであり、屋内運動場に流れた宝小学校、東川小学校の校歌である。聞きながら涙が溢れた。智仁勇の三文字をあしらった校章の由来を説明する小岩校長の挨拶も忘れがたい。懇親会では級友や憧れのマドンナだったジジ、パパたちと昔話に花を咲かせた。滅びるものは美しい。母校への感傷旅行は、これが最初で最後になった。

（道南会 顧問）

▲新刊紹介▲

函館の美しい街並みの今と昔を写真で編集した本が出版されました。北海道新聞社の発行で、筆者は木下順一さん、写真は佐藤弘夢さん。本の帯には「北の古都函館の変貌を歩く。北海道の玄関としての役割を担った街。いたるところに残された過去の記憶と現在をたどる」と書かれている通り、昔の写真と今の街の姿を対比しながら編集されていますから函館大好き人間には座右の本です。書名は「函館 町並み今・昔」、定価は一七〇〇円、希望者は事務局か東京事務所申し込んで下さい。

ブルガリア・トルコ・チェコの旅

川守田 孝 平 (副会長)

道南会の有志は、今年もブルガリアでの櫻植樹の旅のあと、トルコとチェコを回るのを楽しみにしていた。ところが九月十一日の同時多発テロのため、トルコが報復に巻き込まれるのではないかと心配から、キャンセルが相次ぎ僅か七名だけの旅行になった。成田での搭乗のチエックは異常に厳しく前途が思いやられた。

ところが最初に訪ねた、黒海沿岸のリゾート地、ブルガリアのバルナは、夏の終わりを楽しむ多数の観光客で溢れ、テロによる危機感あまり感じられなかった。シュテルコフさんの案内で前に櫻を植えたプリモルスキー公園に行き、相馬先生の名にちなんだ「相馬の小径」を歩いた。

だが、広い静かな公園の中に両側に櫻の植えられた道が続いている。いつか、この櫻が満開の花を付けるのを眺めながら「相馬の小径」を歩いて見たいと思つた。翌日は市庁舎にヨルダノフ市長に表敬のあと、玄関横に植えられた二メートル程の櫻の根元に、市長はじめ相馬先生以下全員が、櫻の成長を願つて土を盛り、植樹祭を終えた。

成田を出発して三日目、バスでプロヴディフに一泊、世界遺産のリラの僧院を経て、ブルガリアの首都ソフィアに入った。市民は百二十万、路面電車の走る街である。訪れた聖ゲオルゲ教会は四世紀のローマ時代の建物で、モスクから教会に転用されたものという。

またアレクサンドル・ネフスキー寺院は一八八二年から四十年かけて建設され六十米の金色ドームを持ち、五百人を収容できるという大寺院で、豪華巨大なシヤンデリアが見事であった。

旅も中盤となり十二日からトルコに入り、まずカイセリ

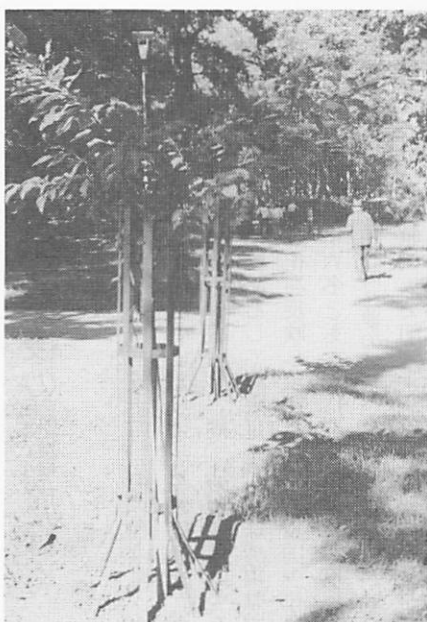
に飛び、バスで地下都市カイマクリに着いた。一九六四年に発見されたこの地下都市は、イスラム軍の迫害から逃れたキリスト教徒の避難所だったという。地下四階もの場所に教会やワイン製造所や貯蔵庫、台所などもあり、千年以上も前からこんな大規模な地下都市で生活する人々がいたことに驚いた。次に訪ねた有名なカッパドキアは「美しい馬の国」という意味だそうで、三百万年前エルジウス山とハツサン山の大噴火によつて溶岩を含んだ軟石、灰、泥で覆われ、それらが雨や風に侵食され、色とりどりの円錐形やキノコ型の岩、穴のあいた峡谷等が出来たといわれ、現実離れた壮観な風景であった。

イスタンブールに戻り、トルコ最大のグランドバザールを歩いてみた。イスタンブールの旧市街地は世界遺産に登録されており、その中心部にグランドバザールがある。十五世紀に出来たという立派な門をくぐって中に入ると迷路のような道が縦横に走り、迷わずに出られるのかと、心配しながらの買物であった。

旅の終わりに訪ねたのはチェコ共和国のプラハであった。すでに晩秋の気配で



プラハの衛兵



相馬の小径

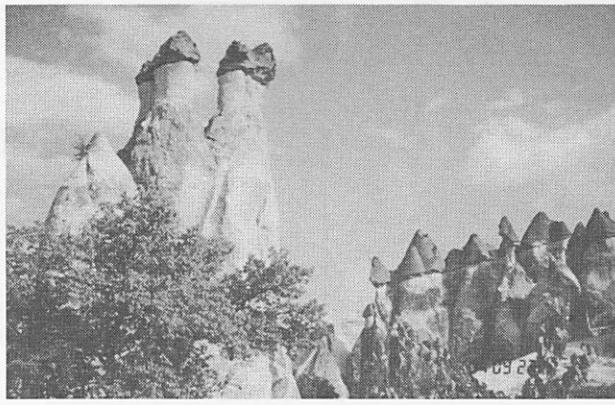
旅の終わりに訪ねたのはチェコ共和国のプラハであった。すでに晩秋の気配で

木の葉は黄色く色付き、真夏のようなトルコからでは肌寒かった。チェコの人口は約一千万人、北海道の半分ほどの小さな国であるが、世界遺産に指定された場所が十ヶ所もあり、私達の訪ねたモルダウ川沿いのプラハ歴史地区もその一つであった。人口百二十万のプラハは「百塔の町」「北のローマ」とも呼ばれ、九世紀ボヘミア王国の首都になって以来、千年の時を経て街全体が歴史博物館のように形成されている。

プラハ城の門には直立した衛兵が立ち観光客が並んで写真のモデルにされている。モルダウ川を見下ろす城壁の上からは観光船が行き交い、川面に映える街の建物が綺麗であった。

城の横手に一三五七年、黄金のプラハと謳われたカレル四世によつて構築されたカレル橋が架かけられている。観光客と土産物売りでこった返す橋を渡り、旧市街の教会などを眺めてホテルに戻った。

二日目の夜は一四九九年創業のビアホール、ウ・フレクで夕食をとった。若い観光客が大ジョッキを飲み干しながら楽しそうに合唱している。私達も旅の最後の夜を、ハムやサラダを口にし、十二世紀から続くというピルゼンビールの本場の味を満喫した。



カッパドキア

出発直前に起こったテロ事件で、無事に旅が続けられるか、心配であったが、何処も平穏で、空港での厳しいチェックを除けば嘘のような安全な旅であった。それにしても、人種や宗教を越えて平和な世界を築けないものかと思いつつ、プラハからモスクワを経て帰国した。

函館弁(その六)

川守田 孝 平

「ま行」

ま	船入間
まいだま	まゆ玉
まえげ	眉毛
まかす	水をこぼす
まがだしな	引き合わない
まがなう	身拵え 身仕度
まき	一族
まきり	小刀
まぐ	水をまく
まくらう	ぶちまける
まつこ(馬つこ)	食べる
まつこい	お年玉
ままでに	まぶしい
まなぐ	丁寧に 念入りに
まなぐひくつた	眼
まめしい	眼を閉じた
まるこい	よく働く 勤勉な丸い
まんまるこい	満月のように丸い
(み)	
みつけさかだれ	かくれんぼに入つて
みたく	何々みたいに
みつたぐない	何々のように
	みにくい
	みつともない

みば

みつたぐなし	不器量 醜女
みぐる	外見
(む)	
むぐる	潜る
むしのご	ふくれる すねる
むつたり	しらみの卵
むたむた	いつも
むる	しょっちゅう
(め)	
めつこ	漏る
めめず	半煮えのご飯
めんこい	可愛い
(も)	
もじゃつばない	物事に乱雑なこと
もちよこい	くすぐつたい
もちよこちよい	くすぐつたい
もつた	産んだ
もよもよ	うじやうじやと
	うごめくこと

ゆらなり

ゆらなり	言いなり
ゆるがす	ゆさぶる
ゆるぐない	容易でない
	楽でない
ゆんべ	昨夜
(よ)	
よごぎ	家長の座
よつばげる	酔つ払う
「ら行」	
(ら)	
らくだいぼんず	落第坊主
らんき	無我夢中
(り)	
りぐつたがり	理屈ばかり言う人
りごう	利口
りごうもん	利口者
リリー	すずらん
「わ行」	
(わ)	
わがanne	だめだ
わつか	輪
わつちやくちや	めちやめちや
わつば	曲げもの 輪
わらしやんど	子供たち
わらす	子供

十三年度後半行事記録

☆「サツポロピール千葉工場見学会」

八月十七日(土) 午後一時津田沼駅に集合、バスで工場へ。猛暑の影響でフル操業中の千葉工場を訪ね、マリンシアターや製造ラインを見学。最後は別室で出来たての生ビールで乾杯。参加者三十五名。



☆「道南会夏期懇親会」

九月八日(土) 午後一時より、お茶の水の「ホテル聚楽」で開催。参加者は百三名。(内容、参会者名別掲)

☆「飛鳥山公園の三博物館と

旧古河庭園見学会」

十月十三日(土) 午前十一時王子駅に集合。櫻の名所の飛鳥山公園にある三つの博物館を見学。まず王子製紙発祥の地に作られた「紙の博物館」では、世界中の紙の歴史や実物などを見学。次に「北区飛鳥山博物館」で古代から現在までの北区の歴史を見学した。三つ目の「渋沢史料館」で渋沢栄一氏の事績や史料を見学。隣接する渋沢氏の旧宅もあわせて拝見。昼食後徒歩二十分程で「旧古河庭園」に到着。陸奥宗光から古河財閥に引き継がれた庭園と英国式洋館は、都の文化財に指定されている。洋風庭園に咲き誇る秋のバラを鑑賞して解散。参加者三十名。

☆「平林寺と野火止め遺構を訪ねる」

十一月十七日(土) 午前十一時、東上線の朝霞台駅集合、参加者二十五名。中村副会長から病院のバスが提供され揃って関東の名刹「平林寺」に向う。広大な庭園は武蔵野の面影を残す雑木林の紅葉が美しい。野火を鎮めるための野火止めの用水の跡があり、獲物や外敵を見張るための野火止塚も残っている。古今集の「都鳥」の歌を詠んだ在原業平の歌碑の

前で弁当を開く。中村さんの病院から運ばれた暖かい豚汁が振舞われ、晩秋の空気の中で一段と美味しかった。帰路もバスで中村さんの「東所沢病院」の老人医療施設を見学、素晴らしい環境と最新の施設は大変参考になった。



午後三時、朝霞台駅で解散したが、有志は中村さんに誘われ「朝霞台中央病院」の患者慰安の出前奇席を患者さんに混じって見物。落語や太神楽を楽しんだ。中村副会長と傘下の病院関係者にお世話になった一日であった。

同窓会 便り

◆東京幸小学校同窓会

九月二十九日(土)

エルシー竹芝

四十八名

◆函館西高庁立高女合同同窓会

十月二十日(土)

エビスガーデン

三三〇名

◆東京弥生会

十月二十日(土)

日本橋・三越

二〇名

◆白楊ヶ丘同窓会東京支部総会

十月二十八日(土)

ダイヤモンドホール

二〇〇名

◆函館工業高校同窓会

十一月三日(土)

芝弥生会館

三十五名

◆東京青柳会

十一月十五日(木)

ダイヤモンドホール

三十五名

◆函館遺愛同窓会

十二月五日(水)

青学会館

一九〇名

会報「道南」十四年新年号

発行 平成十三年十二月二十日

発行所 北海道道南会事務局

中央区日本橋三六一十

印刷所 (株)ソーラン社

中央区日本橋小伝馬町十六一八

(株)邦友内